



# 日本盆栽作家協会会報

第21号

平成 25 年 10 月 1 日



# 盆栽は作家なくして作品なし 作品なくして芸術なし

盆栽は、十年手元に持つと、真に自分の「作品」となります。十年といわないまでも、最低でも五年は手元に持つて自分の「作品」として愛情をかけて欲しい。

それくらい心の余裕が無くては、楽しさがわいてこないし、心の眼も、真の審美眼も開けません。

そして、作家としての目的意識を持ち、個性的な作意と創意で作る。そこで初めて芸術たりうるものが誕生するのです。

日本盆栽作家協会は、盆栽界の発展のために真の盆栽の「作家」を育てていきたいと考えています。

## 第21回作家展

会期／前期 平成24年10月12日(金)～10月17日(水)  
後期 平成24年10月19日(金)～10月24日(水)  
会場／さいたま市大宮盆栽美術館  
主催／日本盆栽作家協会

### 前期展示作品



米栂（こめつが） 米沢増雄

米栂の自生地と言えば、すぐにも八ヶ岳周辺の立山や美ヶ原（長野県）、また樺平（富山県）等を思い浮かべ、まことに清々しい景色に、気持も晴れやかになります。本盆栽の根張りや枝配りなどは、30年以上の歳月を重ねて作り上げたもので、この姿が、本樹種の自生地を彷彿とさせてくれます。

山茶花（さざんか）  
山田登美男

椿は、古来神聖な樹木として崇められてます。特に梅に先駆けて咲くツバキ科の一品種である山茶花は、地方によっては寒椿が咲いたと喜ばれています。この椿は、個性的な美しい曲線の幹模様と、鉢の中で長い歳月をかけて培養を重ねた古さを備え、貴重な品格をもっています。



第21回 作家展（於：大宮盆栽美術館）

### 真柏 吹田勇雄

真柏の魅力と言えば、生と死の狭間、つまりジンやシャリ、そして、水吸いと呼ばれる生きた幹との対照にあります。出品樹にはそうした厳しさは少ないのですが、鉢の中での長い培養による古さがあり、また枝の流れに特徴があります。今後は枝の簡略を計り、真柏の魅力さをさらに追求したいと考えています。



### 五葉松 須藤雨伯

盆栽の美は、一木一姿につきると考えます。この盆栽は先代より受け継いだもので、私が五十年丹精した作品です。以前は主幹の根元より四本の小幹が立ち、五幹の株でしたが、主幹が太くなり、立上りに力強さを感じた時に単幹としました。盤状の根張りより立上る、幹の力強い姿に古木の風格を感じ、一の枝の流れ下る姿に松の風情を観ています。



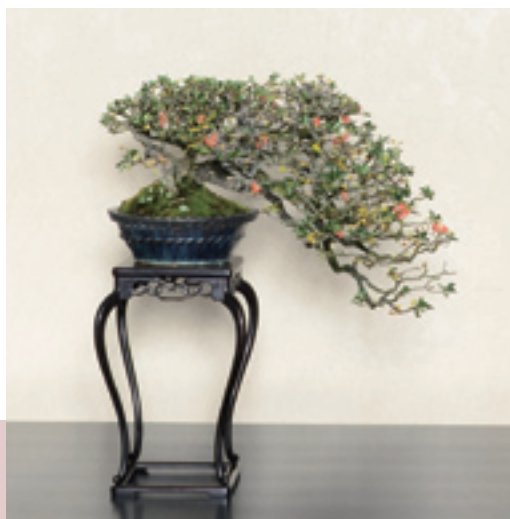
### 五葉松 阿部健一

私の盆栽は、近所の農家の庭で60年間庭木として育てられたものです。これを譲り受け、鉢上げした後、35年間盆養を続けて来ました。先代である父、倉吉の教えは、盆栽の基本は「吾妻山の自然樹から学べ」というものでした。その姿の中に、自然らしさを表現する事が大切であるとの教えです。この作品の中に、自然らしさを感じて頂ければ幸いです。



### 長寿梅 今井千春

第84回国風展出品樹。懸崖の枝が弱らないよう肥培、葉刈りを繰り返し、現在に至ります。長寿梅ならではの小枝のほぐれや、歳月を重ねた古相感を鑑賞して頂きたいと思います。



### 花梨(かりん) 野上寿明

この花梨は、25年ほど前に求めたものを、取り木を行い、できるだけ枝を細かくするように、常に心がけて作ったものです。



### 五葉松 小林國雄

盆栽界では、黒松は「皮性」、五葉松は「葉性」と言われるように、本樹も素晴らしい葉の性質を特徴としてもった樹です。また、盆栽の基本的な見どころである根張りは、力強さと品格を兼ね備えています。

真弓 ロレンツォ・アニョレッティ (イタリア)  
古木ならではの姿の厳しさと、これとは対照的に、たわわに実った可憐な実成りも、本樹にひとしおの風情を添えています。



ミヤマカイドウ  
深山海棠

### 盆栽界の課題

盆栽というのは、飾ってある樹をちよつと見た程度では本当の良さがわかりません。樹の前に座って長い時間向き合っただけでわかるもの。1時間で飽きるような盆栽は大したことがないのです。

そういう盆栽を作るには、足し算より引き算が肝心。足し算で作った盆栽は案外飽きられます。もう一ランク上をめざすなら一旦足し算で作ったものを再びマイナスする。それで初めて本格的盆栽になる。本物の盆栽美や味わいが生まれる。マインナスするのは美学と勇気と精緻な計算が必要です。

その一方、真剣に盆栽に立ち向かっていると、人間の方が弱いですからヘトヘトになって打ちのめされることもあります。



日本盆栽作家協会代表幹事

山田登美男

## 新しい盆栽界の展望と今昔

私が清香園で修行中（四十八年前）の頃、この業界は扱う商品はすばらしいが、担当する者の人間性には改善の余地があるとしばしば聞かされました。また、盆栽名品を芸術という割には国風展などの陳列でも作家名が無く、表示されるのは蔵者名という点は、私自身妙に思いました。今時点も変わっておりませんし、プロの作風展までも最近、蔵者名で陳列しておりますことは残念です。

それはともかく、盆栽づくりには先見力が不可欠です。若木時点で「この樹をどう作ろう？」と考え、10年後20年後、さらには50年後を脳裏に描く。その能力がないと本物ではありません。やはり自分で姿をつくって、これなら社会で一人歩きできる姿だから、誰に買って頂いても楽しめる、楽しいだろうなあというそこまでいってはじめてその

樹が作品化され、名前（銘や作者名）がつく。あるいはお金になる。それこそが本物の作家で、当然、その姿には作者の盆栽理念や美学・感性、果ては人間性までが反映されています。

山採り品についても、回し台に乗せてぐるりと一回りさせれば「ここしか正面になりようがない」という正面が見いだせるものです。それが見切れないと正面を変えたり枝の振りを変えたり、迷うことになります。

ただし先見力や「見切る」力は、生半な精進では得られません。このことに気づいた私は、有志とともに「盆栽作家」をめざす勉強会をスタートさせ、それからほぼ10年後の平成3年に、正式に「日本盆栽作家協会」を立ち上げました。国内に美術館を作ろうと活動し、行政にも提案し、実際にできたこともその活動コンセプト（考え方）の一環でした。

そこで自分自身手軽に作れて楽しめ、初心者にわかりやすい盆栽も欲しいとの思いから「彩花盆栽」を発想。28年以上前に個展（於・三越百貨店）を開きました。時期尚早でその時はあまり認められませんでした。近年、山野草ブームの定着とともに（特に女性層に）評価され始めたのを喜ばしく思います。

いずれにしても理想を秘めた盆栽なのでから、たずさわる側の人間もそれに近づく発想や方法論を持つべきです。そうでなければ盆栽界が発展しません。今後、各自が持ち分をわきまえて自分は何をすべきか、大きく言えば盆栽を通じて社会に何が貢献できるかを考えることが必要になってくると思います。

盆栽は戸外で日を浴び、輝いている姿こそ美しい。朝日に輝く盆栽、盆栽業界でありたいですね。



(日本盆栽作家協会講師)  
今井 千春



# Sakka-Ten 2012 —スペイン大会—



ペニスコラの古いお城



(右頁上) 大会の様子がスペインの  
盆栽雑誌に掲載されました。  
(右頁下) 右から二人目 山田会長、  
左端 今井講師  
(上・左) デモンストレーション風景



地元テレビで大会の様子が放映されました

展示会場



Tomio Yamada, président et fondateur de la Nippon Bonsai Sakka Kyokai, a tenu à être présent pour cette édition en Espagne.



Tomio Yamada a mis en place trois tokonoma lors de la cérémonie d'ouverture de la Sakka Ten, affirmant ainsi la dimension culturelle de l'événement



La cérémonie d'ouverture a réuni des personnalités, dont, au premier rang, de droite à gauche, Lorenzo Agnoletti (président de la Nippon Bonsai Sakka Kyokai Europe), Chiharu Imai, Tomio Yamada, professeur Aldo Totini (professeur de japonais classique à l'université de Venise), Masahiro Ohwada (chargé d'affaires au Saitama tourism and International Relations Bureau) et le consul général du Japon à Barcelone.



第5回NBSKKE (日本盆栽作家協会ヨーロッパ) 大会 (SAKKA TEN 2012年一回開催) は、スペイン ペニスコラ市において11月2日から5日において盛大に開催され、無事に大成功裏に幕を閉じました。  
開会式には、ペニスコラ市のアンドレス・マルティネス市長より歓迎の挨拶があり、続いてバルセロナ日本総領事の淵上隆先生、日本盆栽作家協会ヨーロッパ ロレンツォ・アニョレッティ会長と続き、最後に作家協会ヨーロッパ名誉会長でもある山田登美男会長が日本盆栽作家協会を代表して挨拶と床の間飾りについて講義とデモンストレーションを行いました。  
会期中、本協会の派遣講師である今井千春氏による、連日のワークショップとデモンストレーションと講義と懇親会を含めて、大変に質の高い盆栽展示と勉強会となり、ヨーロッパの盆栽界の発展に希望を感じ、次回の大会も、今から楽しみなものとなりました。



(日本盆栽作家協会常任幹事)  
小林 國雄



# 2012 中国盆景精品展



(右頁) 開会式 (上) 展示作品  
(左上) 展示作品の前にて筆者  
(左) 海外招待講師によるデモンストレーション



2012年9月、尖閣諸島の問題で反日デモがくり広げられている中、中国・広東省盆景協会の25周年の大会に招待され、広東省の中山に向かった。反日の影響を考え、私のデモンストレーションと舞台での日本人の紹介はとりやめとなったが、皆、私に親切にしてくれた。大会に来て驚かされることは、まず規模の大きさである。陳列された盆栽の数も六百鉢あり、またその盆栽の大きさには圧倒される。十メートル近くもある石の水盤に寄せ植えされた樹と石組の枝で自然を現して、中には水を循環して流したり、人や馬や家などの添景を配している作品もある。金、銀、銅と賞を付け、出品者に喜んでもらっていた。

湾、韓国、タイ、香港、シンガポールなどから二十人近い人々がいた。大型バス一台を借り切り、海外からのお客様を二日間、盆栽園めぐりをしてくれた。深圳から東莞へ向かう趣園では三千枚近くの支那鉢を見て驚いた。広東省佛山市に百二十軒もの植木と盆栽を扱う業者が集まっている。台湾から移民して来た人も多いという。

盆栽は、千三百年前に中国で生まれ、八百年前に日本に渡って来た。日本人の感性と美意識によって現在の盆栽の型が確立された。彼らは日本の盆栽は型にはまりすぎているとおもしろくないと言う。しかし盆栽の中から、「侘び寂」を感じ取る精神を持つているのは日本人だけではないだろうか。

我々日本の盆栽作家は、中国からもっと色々なことを学ばなければいけないと、中国に来るたびに考えさせられる。



## 南米・チリの盆栽界

2012年9月初旬、南米・チリのサンティアゴの国立図書館の中庭に、盆栽博物館ができた。設立の中心になった方は、チリで盆栽園を営んでいる、アレクシスピタル氏で、盆栽博物館を通して盆栽の素晴らしさを啓蒙する事が前から夢だったそうです。

筆者は、彼から招待され、開館式でテープカットし、その後、黒松のデモンストレーションを行いました。協力団体として、日智文化協会、チリ国立図書館、サンティアゴ日本人会、文部省、日本大使館、ユネスコなどが後援していました。

後日、サンティアゴ日本人会の会館やアレクシスピタル氏の農場でもワークショップを行いました。

盆栽が地球儀で見る、日本の真下まで広まっている事は嬉しいことです。

(小林國雄)



彫刻家（文化勲章 受賞者）  
朝倉文夫

## 盆栽は自然美の表現！

盆栽と彫刻とは、形を立体的に造り出すことに於いて最もよく似たものである。しかし彫刻も盆栽もただ形を精巧に写すだけでは芸術品とはいえないのである。

対象そのものが持つ個々それぞれの精神、風格が美しく表現されなければならない。

彫刻は対象の内部に秘められている美を掘り起こすためにその魂を捉えて余計なものを取り除く仕事だ、という。

盆栽もそれと同じで、素材の持つ余計なものを取り除き植物の成長力を気長に育み、形を整え、自然美を生動させることに於いて一致している。

## 後期展示作品



もみじ（獅子頭） 山田登美男

獅子頭は、数あるもみじの品種の中でも、特に人気があります。それは現代社会に好まれる条件が揃っているからでしょう。新緑と紅葉、そして落葉時の佇まいがそれぞれ美しく、また環境に強いことが特徴です。20年にわたる育成の中で、初めての床の間飾りとなります。幹模様の美しさをご鑑賞ください。



真柏 福舘 治

真柏は、私の一番好きな樹種であり、被災地の盆栽人として思い入れが深い木です。今回、展示の機会を頂いた事に深く感謝します。復興の狼煙の一端になることが出来れば幸いです。



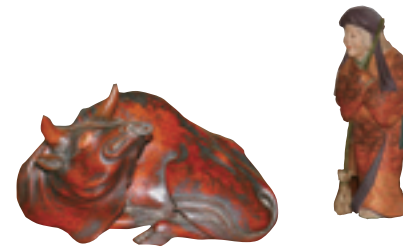
楓（石付） 矢内信幸

今年は夏の暑さのため、培養管理に大変苦労しました。紅葉の時期には少し早い展示となったのが残念です。私は楓の石付き盆栽に大変魅力を感じております。この作品も好みの一鉢であり、丹精の味わいがようやく出てきているように思います。



山もみじ（石付） 菊岡成泰

山を散策することが好きなので、そのような景色をこの盆栽に観ております。長年にわたる培養によって、根元にかんだ石が幹と調和しており、この姿に自然樹の美しさを感じております。



黒松（銘 翔鶴） 小林國雄

この樹を入手した時は、樹の頭頂部が大きく、幹も左に流れていました。そこで、主木を右に倒し、頭頂部を小さく仕立て直して右に寄せ、左下に伸びる差し枝を用いて、この樹に空間と流れを作り上げました。

黒松 田中泰道

25年前、四国で購入し、それ以来ずっと作り込みを続け、やっと今の形になりました。元々の幹の曲がり良かったので、山採りの味が出ました。



赤松 鈴木英夫

本樹は、長野産の赤松です。幹の頂上が垂直に折れ曲がった特徴を生かし、文人木調の姿に仕上げました。この垂直に下がった幹を曲げ込みながら、再度上に向け、自然の厳しさと生きる力を表現しました。



もみじ（紅千鳥） 秋山 実

もみじの品種の中でも、芽吹きと紅葉が非常に綺麗な「紅千鳥」の特徴を生かし、葉を鳥に見立て、まさに千鳥が飛ぶかのような情景を、作品づくりに込めました。また根張りからの立ち上がり、幹の動きのすばらしさも相まって、自然と人為とを合わせ、盆栽の品格を表現できるような心がけました。

※ 3月に都合により、鈴木英夫氏が退会されました。

